

学習院大学名誉教授

篠沢 秀夫さん  
しのさわ ひでお

惜

「パソコンのキーが打てなくなりましたが、ブザーのパソコンで書き続けています。この病気の治療法を開発、よろしくお願い致します」。2014年2月、篠沢さんが京都大iPS細胞研究所の山中伸弥教授にあてた文面だ。妻の礼子さんから当時、教えて頂いた。

筋萎縮性側索硬化症（ALS）。筋力が落ち、からだ動かなくなる難病と診断されて8年余り。稀有と言える病に遭遇した悲運を恨む言葉は皆無だった。「神様のように（礼子さん）」に全うした。

本業はフランス文学者。

## 悲運を恨まず言葉つむぐ

なじみ深いのはクイズ番組での珍解答ぶり。「愉快、愉快」と笑いとばした。

病状をうかがったのは告知から約5年たった冬。しやべることもできず、自由はほぼ失われていた。右手の甲を使って押しブザー式に文字を選べるように工夫されたパソコンで数時間かけ、言葉をつむいだ。日々の執筆活動で同じ病と闘う患者に勇気を与え続けた。

この病は24時間介護、重度だと1日6人の人手がいる。礼子さんが文字通り手足となった。14年1月、問われた。「STAP細胞って、すごいんですか」。作製が簡単な万能細胞だと発表されたばかりだった。

「パパの症状も止まりますか。治りますか」。期待に満ちた表情に不治の病と寄り添う真のつらさを見た。

いまだALSに特效薬はない。山中教授の弔辞は宣誓だった。「研究の成果を一日も早くご報告できますように一層努めさせていただきます」



お気に入りの散歩コースで。篠沢秀夫さんと妻の礼子さん。2013年11月、東京

10月26日死去、筋萎縮性側索硬化症（ALS）を患って 84歳

（藤島真人）